

吉田容子、影山穂波編著（古今書院、2024年）

ジェンダーの視点でよむ都市空間

松岡 由佳*

本書をめくると、扉裏に *Understanding Gender and Urban Space from the Geographical Perspective* という英文タイトルが記されている。編者を含めた11人の執筆者は、いずれも地理学を専門とする。地理学とジェンダーの間にどのような関係があるのかと思われた方もいるかもしれないが、地理学の重要な概念である空間や場所には権力関係が刻まれており、本書の執筆者たちはジェンダーという切り口からその解明に取り組んでいる。章立てに沿って、本書の内容を順に紹介していこう。

第1章「なぜ地理学にジェンダーの視点が必要なのか」（吉田容子・影山穂波）は、ジェンダー概念や地理学におけるジェンダー研究の展開をまとめた理論的な章である。未知なる世界や自然を「客観的」に観察して記述するという伝統的な地理学の知は、男性によって形成されてきたものであり、女性は研究の主体にも対象にもなれなかった。その批判として1970年代に登場したのが、第二派フェミニズムの影響を受けた英語圏の女性研究者によるフェミニスト地理学である。目に見えるもの、地図に表せる事象を主に扱ってきた地理学において、空間に隠れた可視化しづらいジェンダー関係を取り上げることの意義を論じている。

第2章から第11章では、それぞれの執筆者が自らの研究をもとに考察を行っている。

第2章「労働とジェンダー」（影山穂波）では、日本で女性の社会進出を促す法整備がなされてきた一方で、性別役割分業を前提とした制度や就業構造のもと、雇用形態や賃金の男女格差が依然として残ることが指摘される。その上で、インドのチェンナイで働く日本人女性の事例をもとに、自由やゆとりを持ちづらい日本的な労働とは異なる働き方を考察している。第3章「地域社会とジェンダー」（関村オリエ）が論じるように、日本の都市空間には、男性は都心（生産労働の場）に通勤

し、女性は郊外（再生産労働の場）で家事や育児を担うという性別役割分業が明瞭に表れている。郊外ニュータウンに暮らす主婦たちが起業して活躍の場を得る例もみられるが、それは安定した家庭を基盤とする女性たちの生産／再生産の過重労働によって成り立っている。

第4章「ケア・サービスとジェンダー」（久木元美琴）では、女性労働力率の上昇とともに、特に都市部において保育や介護などのケア・サービスが不足してきたことが指摘される。これを踏まえ、公式統計には表れない「隠れ待機児童」やケア施設の立地問題、先進国におけるケア労働力の不足と「グローバル・ケア・チェーン」など、ケアをめぐる多様な地理学的視点が示されている。第5章「ジェンダーと視覚表現」（福田珠己）は、フェミニスト地理学者のジリアン・ローズ（Gillian Rose）による視覚表現研究の枠組みをもとに、コロナ禍の「ステイホーム」が親密で安全な場所として表現されていたことを批判的に検討する。その上で、ホームを女性的で私的な領域に位置づけようとする二元論的理解への問題提起を行っている。

第6章「ジェンダー化された空間の生産」（原口剛）は、単身男性労働者が集まる釜ヶ崎の変容を論じる。高度経済成長を支える安価な労働力として若い単身男性が流入し、バブル崩壊後はジェントリフィケーションの波が押し寄せた。その過程には資本主義とジェンダーが絡み合っていることを、アンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre）の「空間の生産」論に依りつつ問題化する。第7章「政治権力とセクシュアリティ」（吉田容子）は、都市空間における遊廓の配置や売春街の形成をたどる。戦後に外国軍が進駐した呉市の事例からは、占領する側の権力や地方行政、外国籍の兵士たち、売春関係の業者や女性たち、そして市民といった多

* 名古屋大学大学院環境学研究科

様な差異や権力関係が重なり合いながら、女性の身体やセクシュアリティが管理されていたことが明らかとなる。

第8章「都市空間とセクシュアリティ」(須崎成二)は、欧米の都市にみられるゲイディストリクトや日本の新宿二丁目地区の事例から、それらの地区が同性愛者にとっての拠り所となっていることを論じる。その上で、レズビアン空間は、女性であり同性愛者であるという二重のマイノリティ性によって可視化されづらくなっていることを指摘する。第9章「移民女性の組織化と『場所』の創造」(阿部亮吾)は、在日フィリピン人女性の自助団体を取り上げる。フィリピン人女性が直面する家事・育児の過度な負担や配偶者からの暴力などの問題は、家庭という私的空間に閉じられてきた。そうした問題を公的空間に開くためには「中間的な場所」が必要であり、自助団体の活動場所がその可能性をもつことを論じる。

第10章「グローバル・サウスの女性労働とジェンダー」(太田麻希子)は、発展途上国の不安定就労やグローバル都市における低収入のサービス労働を女性や移民が担っている状況を問題化する。その上で、フィリピンの事例から、グローバリゼーションのもとでの女性就労がローカルなジェンダー規範に方向づけられていることを指摘する。第11章「異なる場所の異なる声をきく」(倉光ミナ子)は、サモアの事例をもとに開発とジェンダーについて考察する。サモアでは、兄弟たちより姉妹たちに高い社会的地位を与えるという慣習・伝統が存続しつつも、キリスト教化の過程で「夫に従う妻」という規範が受容されてきた。この事例が示すのは、具体的な「場所」の歴史や女性たちの声に基づいてジェンダー平等を考えることの重要性である。

地理学でジェンダー研究に取り組む日本の研究者は未だ少数派であり、主に地理学書を刊行してきた出版社から本書が上梓されたことの意義は大きい。読者には地理学やジェンダーに関心のある

学生が想定されており、各章末に添えられた文献案内や学習課題から、読者が興味・関心に沿って学びを深められる構成となっている。学生時代の評者は、ジェンダーという言葉に敷居の高さを感じていた。学問としてのジェンダーに出会うことも大切であるが、まずは身近な問題なのだという意識をもつきっかけが必要であると考え。本書のような初学者にも読みやすい書籍を通じて、身の回りに潜むジェンダーの問題をとらえるためのヒントが得られるように思う。その次のステップとして、研究のすそ野が広がることを期待したい。

また、本書の末尾には補章「フィールドワークにおいて注意すべきこと」(杉江あい)が設けられ、フィールドにおける調査者の立ち位置が研究に与える影響や、フィールドで起こりうるハラスメントの問題に触れている。こうした調査・研究のプロセスは、地理学ではこれまで十分に検討されてこなかった問題であり、ジェンダーの視点を活かしつつ議論を深めていく必要があると思われる。

本書で惜しまれる点としては、執筆者の間でジェンダー概念についての考え方や問題意識に違いがあるように感じられ、全体を踏まえたまとめにあたる章も設けられていないことから、本書を通じたメッセージをどのようなものとして受け取ると良いか少し戸惑った。もっとも、ただ一つの声へと集約せずに、つねに多声的であることが、ジェンダー研究においては重要かもしれない。もう一点、都市を鳥瞰するような表紙写真が気になった。都市空間におけるミクロな権力関係を扱う本書の内容とは相容れないように思うが、「どこでもない場所 nowhere」から研究対象をとらえてきた従来の地理学への批判が込められているのだろうか。写真の着色は、都市空間へのまなざしが無色透明で中立的ではなく、男性中心主義というレンズを通したものであったことを表すのだろうか。